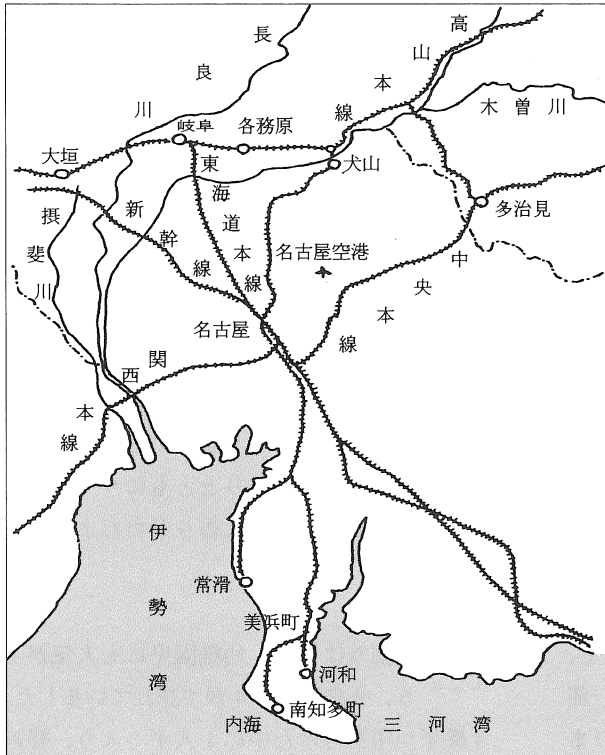


おもを掘って、ヤッコラサ

いも類振興情報 編集部



昭和32年（1957）に航空自衛隊岐阜基地が開設されました。大正時代に飛行場ができてから80周年、航空自衛隊の時代になってから40周年を迎えます（平成9年、1997）。時折ジェット機が美しい飛行雲を曳きながらとんでゆきますが、毎年秋に催される航空祭では、5色の航跡を曳きながら飛行するブルーインパルスのアクロバット、その他の実演があって、地元に着した愛される自衛隊として多くの市民がこの祭りに参加しています。

市内の川崎重工業では航空機の開発・製作が行われ、平成8年（1996）春には航空宇宙博物館も開かれて、いつも大勢の参観者でにぎわっています。この博物館には大小24機の飛行機が展示されていますが、低騒音実験機「飛鳥」、かつて国内線で活躍した国産旅客機Y

S-11なども含まれており、またバーチャルリアリティ技術を生かしたシミュレーターも設置され、実際に操縦かんを握って飛んでいるような感じが味わえ、子供ばかりでなく大人にも楽しめる施設です。

各務原市はまた、農業のさかんなところです。御岳山の火山灰地は肥沃で、水田のほかニンジン・サトイモ・ネギなどの野菜が豊富にとれます。とくにニンジンは作付面積・生産量ともにわが国有数の産地として知られ、生鮮野菜として出荷されるほか、ヘルシーなジュース製造にも用いられます。このジュースはややニンジンの香りが強いものの、果汁

「航」空宇宙文化都市、岐阜県各務原市は濃尾平野の北端にあって、大河木曾川をへだてて愛知県犬山市と向かいあっています。旧陸軍航空揺籃の地でその歴史は古く、明治維新当時大砲射撃場として開かれて以来陸軍の砲兵演習場として使われ、大正6年（1917）にわが国で2番目の陸軍飛行場となりました。いちばんはじめに開かれたのは埼玉県の所沢ですが、現在ではなくなっていますので、各務原が最古ということになります。戦前戦中（犬山城）を眼下に眺めながら訓練に励んだところで、戦後一時米軍に接収されましたが、

が添加されていて飲みやすく、ビタミンAをはじめ栄養が豊富で、ここの名産の一つに数えられています。十数年前までは市内に岐阜大学農学部が置かれ、農業研究もさかんに行われ、戦中戦後には主食代用としてのサツマイモの品種改良も手がけられましたが、その成果は岐阜1号など優良品種育成として残されています。

「往」時よりかなり減少したとはいえ、サツマイモ畑は市街化が進んでいる空地につくられるなど、ところどころに残っており、なかには観光用として経営されているところもあります。10月上旬、快晴の日に同市蘇原のいも掘り農園をたずねました。ここには3ヘクタールのサツマイモが作付されています。地面をびっしりと覆うつるは太く、おう盛に生育していましたが、経営主の小林さんの話では、品種はベニアズマで苗は自分で仕立て、5月中旬頃が挿苗の最盛期だそうです。一部すでにつるが刈りとられている場所もありましたが、これは訪れる観光客が掘りやすくするためのものであって、いまの、とくに若い人たちは、つるが茂っているとどこにいもができていいのかかわからないことが多い、とのことでした。いも掘り園をたずねるのは中年

の女性グループが多く、また家族連れも来ますが、男性は少ないとのこと、やはりサツマイモは女性好みのものなののでしょうか。傍らでは中年の夫婦連れが、いかにもいも掘りを楽しむといった感じで、株のまわりの土を小さなシャベルで少しずつとり除いていました。昨夜は雨が降ったのに、土は割合とさらさらしていて、濃い赤紫色の肌をしたいもが現われました。1つ、2つ、3つ、1株に3個着いているようです。いちばん大きそうないもの肩を持って静かに引き上げ、また残りの2つを握って引くと、いもは傷つくことなく株ごと掘り上げられました。土が適当に湿っていたせいか、降りそそぐ陽光のもとでのいもの色は鮮かで、土の香りとともにサツマイモ特有の、うす甘いような香りがただよってきました。

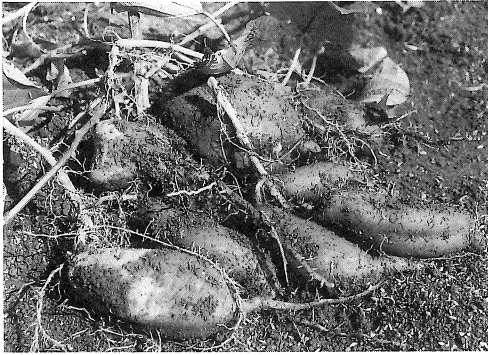
「い」も掘りはまた、幼稚園児にも人気があり、今日もバス4台で訪れていました。3株ずつ印を付けた中に1人ずつ入り、経営者のおじさんから「サツマイモは夏の間につるが伸びて、秋になると土の中においもができる」という話を聞いたのちに掘りはじめましたが、やはり小さい子なので、先生、付添いのお母さんたち、バスの運転手さんたち



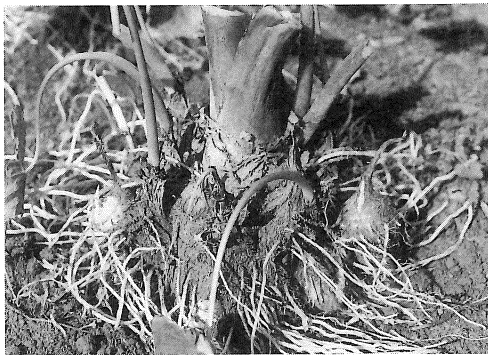
みんなで楽しいおいも掘り



こんなにたくさん掘ったよ



ベニアズマの出来



掘り上げられたサトイモ

が手伝ってまわりの土をかきわけ、いもが半分くらい出たところで園児たちが小さな手で引っ張ります。丸いもの、長いものなど、さまざまな形のいもが現われますが、「あったっ」と嬉しそうな声をあげる子、無表情に掘り上げたいもをビニール袋に入れる子など、さまざまです。土の中から白いコガネムシの幼虫が出てくると、「あ、虫だ」とはずんだ声がひびきましたが、やはり小さい子供にとっては動かないサツマイモよりも、動く虫のほうが興味がそそられるのでしょうか。

袋いっぱいのおいもを嬉しそうにかかえて、園児たちはバスに乗りこみました。家に帰ってから今日のいも掘りのことを楽しく語り合うことでしょう。

いも掘り園の近くの田んぼでは、イネ刈りのコンバインがいそがしく働らき、秋たけな

わです。小学生の頃、やはりいも掘り遠足に行ったときのことを思い出しながら、快晴の空を仰いで深呼吸をし、久方ぶりに童心にかえって幸福を味わったひとときでした。

〔名〕 古屋市から南に伸びる知多半島は長さ45km、もっとも高いところでも海拔50mの平坦地です。大きな川がなく、水利が不便で、いかに水を確保するかが大きな問題で、昔から各地に溜め池が設けられて農業が営まれてきました。昭和37年（1962）に木曽川から取水し、半島を縦貫して南端に至る愛知用水が完成し、恒常的に潤沢な水が供給されるようになり、この地域の農業発展に大きく貢献しました。同用水はまた、工業・生活用水としても用いられ、篠島・日間賀島など半島南部にある離島までも供給されており、まさに半島の命の水となっています。

知多半島は東は三河湾、西は伊勢湾に面し、気候が温暖で、稲作のほか果樹野菜栽培・酪農業がさかんで、一部ではジャガイモの秋作栽培も行われています。また半島南部はとくに暖かく、温州ミカンの生産地として知られ、面する内海は波おだやかで、魚・ノリなどの海産物も豊かです。

半島南部の美浜町にはいくつかの有名な施設がありますが、その一つは杉本健吉画伯の作品が展示されている「杉本美術館」で、都座を離れた林間に設けられた静かなたたずまいには、ヨーロッパ各地、あるいは国内の風景・建物・人物などが、水彩・色鉛筆・墨あるいは木炭などを用いて、親しみのもてる表現で画かれています。画伯はまた構想が斬新で、新装成った名古屋城内の能楽堂の背景に、従来から画かれていた老松ではなく、若松を

画き、それが不思議と伝統芸能である“能”とマッチしています。いなかの小駅から歩いて5分のところですが、連日多くの参観者が訪れています。

「ふれあい水族館南知多ビーチランド」は同町の伊勢湾寄りに設けられています。この呼び物はラッコで、1日数回餌として貝を与えますが、もらった貝を水の中で仰向けになりながら前足で叩き割るしぐさが可愛らしく、とくに子供たちに人気があります。アンカが輪をくぐったり、階段をのぼったり、椅子にすわったり、また数頭のイルカが一斉にとび上って輪をくぐり抜けたり、投げたボールを口でくわえとる、などのショーもあり、イルカといっしょにプールで泳ぐ体験もできます。

【美】 浜町には、地域への新鮮良質な食材の供給と、あわせて観光農園の組織化、魅力ある農業の発達、農業所得の向上、をはかるために、農林水産省の補助を受けて事業を行っている農事組合法人があります。地元でとれた野菜・果物、それに海産物を販売しているほか、ふれあい貸農園ではそれぞれが思い思いの野菜をつくりっており、温暖な地を活かしてミカン狩り、イチゴ狩り、そしてサツマイモ・サトイモ掘りができますが、10月下旬の暖かい小春日にこの農事組合を訪れました。

有機・無農薬栽培が売りもので、サツマイモは金時を、6月上旬に黒色マルチをした畑に植付けたものでしたが、^{つる}がやや繁茂し過ぎていたのが少々気になりました。きつと多量の堆肥が施されたのではないかと思います。その^{つる}を、根元を残して刈り取り、マ

ルチをはがすと土はさらさらと乾燥しており、株の根元を手で搔くと1株に^{いも}が4個着いていて、やや細目でしたが、いかにも金時らしい赤紫色の肌が現われました。^{いも}が容易に抜けないので、シャベルでさらに土を除けて力をこめて引くと、ゴボウを少し太くしたような^{いも}が抜けてきました。土から掘り出されたばかりのサツマイモは美しい濃い赤紫色でしたが、思ったよりも細く、またよく見ると、ハリガネムシの食害である黒いトンネルがいくらか出来ていました。10株ほど掘りましたが、どの株も大同小異でありあまり太くはなく、虫の食害があって、正直のところ期待どおりとはいえませんでした。原因はよくわかりませんが、あるいは多肥のため^{つる}が伸びすぎて、^{いも}の出来が悪くなったのでしょうか。土壌消毒をしないので虫害がふえたのでしょうか。そもそもが金時という栽培の難しい品種が植えられたからでしょうか。ほとんどの^{いも}が70gから200gまでと小さく、1株あたり400gでは決して好い出来とはいえないかもしれませんが、当りはずれのあるのが^{いも}掘りの面白いところなのでしょう。

サトイモは、土が固く、またしっかりと太い根を張っているので、くわで根を掘り起さなければなりません。傘のようにひろがっている葉を刈り取り、周囲の土を搔き除けて一気に力を入れて起すと、親^{いも}を中心として大小十数個の子^{いも}が一塊まりとなって現われました。時期としては少し早かったかもしれませんが、まずまずの収穫でした。

豊かな自然なのか、秋の陽をいっぱいに浴び、うっすらと汗ばみながら土を搔きわけ、まるで宝を探すように心をはずませて、楽しくひとときを過しました。